

令和 5 年 6 月 5 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12841

研究課題名（和文）近世近代移行期の大阪漢学と地域社会 泊園書院出身者の意識と行動を手掛かりとして

研究課題名（英文）Chinese studies and regional societies in transition from the early modern period to the modern period: Clued from the consciousness and behavior of the graduates of Hakuen Shoin in Osaka.

研究代表者

横山 俊一郎 (YOKOYAMA, Shunichiro)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：60759827

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、泊園書院出身者の事績を網羅的に調査することを通して、大阪の漢学と地域社会との関係について考察した。その結果、彼ら泊園書院出身者は、実業家、資産家、政治家、官僚、教育者、研究者、芸術家、文人、僧侶、宗教家、医師、新聞人、ジャーナリスト、弁護士、裁判官、社会事業家、篤志家、技師、著述家、小説家、社会運動家、武術家として地域で活躍していたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの漢学塾研究は、塾そのものの制度や塾主の思想を分析することが主流であった。しかし本研究では、塾に学んだ学生の事績を網羅的に調査し、その過程で作成した略伝は七百以上にのぼる。この膨大なデータは、漢学を学んだ人々がその叡智を自らの行動に反映させていたのか否か、もし反映させていたとしたらそれは漢学のどの部分であったのか、といった問題にせまる一つの重要な素材になると思われる。

研究成果の概要（英文）：In this research, I examined the relationship between Chinese studies in Osaka and the regional societies through a comprehensive survey of the achievements of those who graduated from Hakuen Shoin. As a result, it became clear that they played an active role in the region as businessmen, wealthy people, politicians, bureaucrats, educators, researchers, artists, writers, Buddhist monks, religious people, doctors, newspapermen, journalists, lawyers, judges, social entrepreneurs, philanthropists, engineers, authors, novelists, social activists, and martial artists.

研究分野：日本漢学

キーワード：泊園書院 日本漢学 門人名簿 地域社会 データベース

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

(1) これまでの大阪漢学の研究といえば、近世に全盛期を現出した懐徳堂を中心に語られてきた。しかし、懐徳堂は幕末期に至ると衰退し、それに取って代わる形で泊園書院が台頭する。同書院は文政8年(1825)に四国高松出身の儒者・藤澤東暎によって開かれて以来、維新の混乱期を除き、終戦後の昭和23年(1948)に至るまで、約百二十年間にわたって商都大阪に存在し続けた。また幕末期には三千人以上、明治期には約五千人の門人が学んだとされ、その「存続の長さ」と「門人の多さ」には注目すべきものがある。適塾など同時期の大阪に存在した私塾と比べても、同書院の規模は群を抜いており、近世・近代移行期における大阪最大の私塾であったといえる。ところが、その規模のわりに、同書院の研究はほとんど進展していない。関西大学の吾妻重二教授が研究の基礎的な条件を整えたものの、懐徳堂研究のような盛況ぶりには至っていない。この要因の最たるものとして考えられるのは、明治期に同書院の全盛期を体現した二代院主・藤澤南岳が、教育勅語を擁護するなど国民教化を主張したことにある。これにより、戦後民主主義の影響下にあった思想史研究者たちに敬遠されてきたと考えられる。ここで、書院の中心にいた南岳ら「学主層」ではなく、その周辺で「学主層」を盛り立てた「門人層」に注目してみよう。すると、社会の流動性が増した近世・近代移行期にふさわしく、尊攘運動家・都市名望家・農村名望家・漢文科教師・医療従事者など 実務家 として、地域に貢献した人物が多数いることが明らかとなる。

(2) 日本以外の中国・韓国など東アジア地域を見渡してみると、儒学・漢学教養人は 思想家 であると同時に 実務家 であった。また、彼らの 実務家 としてのアイデンティティーの中心に「修己治人」の理想があったことは間違いない。ところが、日本に限っていうと、儒学・漢学が最も流行した近世社会において、その専門家である儒者の政治参与が少なかったために、そうした理想もほとんど実現されなかったと結論づけられる。それゆえ、日本儒学・漢学研究においては、儒学・漢学教養人の 思想家 の側面が注目されてきた。しかし、考察時期を近世だけに限定せず、近世・近代移行期として見た場合、水戸学者の藩政掌握に見られるように、日本においても儒学・漢学教養人の 実務家 的側面が強まっていたことは事実である。そうした当時の政治状況を踏まえると、泊園書院が幕末期に台頭するとともに明治期に至って全盛期を迎え、尊攘運動家・都市名望家・農村名望家・漢文科教師・医療従事者など、多分野で有為の 実務家 を輩出した事実は、注目に値する。なぜ同書院出身の 実務家 は地域の有力者として政治・経済・教育・医療分野で影響力を持ち、かつ、公共性の高い行動規範を有しえたのだろうか。それはまさに、東アジア地域の儒学・漢学教養人に共有された「修己治人」の理想が、近世・近代移行期の日本にも浸透し、同書院の出身者の行動として現れ出たからだと思われる。

## 2. 研究の目的

(1) 東アジア地域の儒学・漢学教養人の存在形態と自意識を踏まえつつ、幕末期から明治期にかけて繁栄した大阪の漢学塾・泊園書院の出身者、とりわけ尊攘運動家・都市名望家・農村名望家・漢文科教師・医療従事者として活躍した人々の意識と行動を考察する。また、その作業を通して、近世・近代移行期における大阪漢学の実態とその地域社会とのかかわりを解明し、併せて一国史観の脱却を図る。日本以外の東アジア地域の儒学・漢学教養人は、地主官僚として、政治・経済分野をはじめ多分野にわたって地域社会に影響力を及ぼしてきた。中国の宋代以降、東アジアに伝播した儒学・漢学とは、本来そうした 実務家 の日常に訴えかける言説として構築されると同時に、彼ら 実務家 の意識と行動を拘束し続けたと考えられる。本研究では、この古典学習を踏まえた東アジアのあるべき 実務家 像を念頭に、地域社会の政治・経済・教育・医療分野において指導力を発揮し、かつ、退塾後も同書院とのかかわりを維持した一群の人々に焦点を当てる。また彼らは非・武士身分の者が多く、明治維新を契機として、旧来の統治者である武士に代わって地域秩序を構築した人々ともいえる。本研究において彼らの意識と行動の実態にせまる理由は、こうした彼らの卓越した行動とその台頭を一つの現象として捉えているからである。なお考察では、思想史と地域史(うち政治史・経済史・教育史・医療史)を交えた個々の事例研究を行なう一方で、その研究成果を五百名にも及ぶ同書院出身者の略伝データの中で位置づけることも試みる。

(2) これまでの近世・近代移行期における私塾が果たした社会的役割、とりわけ門人の活動に関する研究では政治分野・国家レベル重視の傾向が拭えない。たとえば松下車塾研究は幕末期の京都、明治期の東京で活躍した「明治の元勳」が一番に挙げられるし、大阪の私塾・適塾にしても、実際は地方医療に携わった門人が多かったにも関わらず、やはり注目を浴びるのは橋本左内・大村益次郎・福沢諭吉など政治・軍事・学問分野において国家レベルの働きをした人物だろう。一方、泊園書院出身者は経済分野・地域レベルで活躍した人物、とりわけ実業に携わった人物が多く存在する。ただ、彼ら自身は実業家というよりもむしろ名望家としての自意識が強かったようで、実業のみならず政治活動にも熱心である。彼らのような資本主義や民主主義など新秩序・新

知識を地域で定着させた人々に注目することが、本研究の独自性である。また、なぜ泊園書院が古い塾風を残しながらも商都大阪に存在し続けたのか、という大きな謎を解くうえでも、この経済分野・地域レベルの視点は必要であると思われる。なぜなら「大阪の漢学塾で学ぶ」ということは、古典読解能力の向上のみならず、一種の都市経験として、帰郷後の諸活動で生かされる人脈や情報を入手できるメリットがあったと考えられるからである。ここに、漢学知以外にも広がりを持つ、いわば都市と地方をつないだ人的・知的ネットワークの解明という、創造的な考察も可能となってくる。

### 3. 研究の方法

(1) 近世・近代移行期の大阪漢学と地域社会とのかかわりを、当該期の泊園書院に学んだ実務家の意識と行動をもとに明らかにする。考察対象者は、同一の地方・地域内において類似の行動をなした複数の門人を抽出し、以下の五グループとして設定する（下線は泊園書院出身者）。

〔 〕 四国地方の尊攘運動家…讃岐の小橋橋陰と土佐の千屋菊次郎は一家として尊攘運動に参加した。また阿波の天羽生岐城は医師でありながら阿波屈指の勤王家である。〔 〕 大阪市域の都市名望家…倉庫業者の杉村正太郎は市議員の傍ら、阪神電鉄の専務となった。製帯業者の新田長三は篤志家の父を持ち、緑綬褒章を受章する。売薬業者の森下博は、その妻と孫とともに紺綬褒章の受章者であった。〔 〕 近畿地方の農村名望家…播磨の蓬萊三郎は民権運動に熱心な家に生まれ、東播銀行の頭取となった。河内の高橋太郎兵衛は村長をつとめる傍ら、金剛水力電気社長である。摂津の前田熊市は大沢銀行の重役をつとめる傍ら、兵庫県の民権運動の中心となった。〔 〕 南海地方の漢文科教師…紀伊の多紀仁之助は、和歌山中学の精神規範「和中魂」（漢文）を制定した。阿波の岡本由喜三郎は詩文結社を主宰し、阿波漢文学の父と言われた。淡路の広田剛は洲本中学で教える傍ら、文化団体「文友会」を設立した。〔 〕 山陽地方の医療従事者…周防の四熊宗庵は村の名医で、子孫は山口大学医学部の前身校に蔵書を寄贈した。備前の難波経直は三備屈指の医師の子で、多くの医師を育成する。備前の額田太仲は村の名医で、子孫は東邦大学を設立した。

(2) 上記の〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕〔 〕で示した分類に従って、まず個々の門人の意識と行動を明らかにし、次に当該地方・地域における門人集団としてどのような役割を果たしたのか、またその特色は何であったかを提示する。については、個々の門人の修学面および職業面、さらに退塾後の書院とのかかわりに注目しつつ、その時々における言説ないしは人的・知的ネットワークを解明する。については、同一地方・地域内における門人間の相違点や共通点を整理しつつ、一つの集団として総括するとどのような結論が得られるのかを検討する。具体的な資料としては、〔 〕は『讃岐名和氏小橋安蔵一門勤王史』や『千屋一族の勤王：付千屋家文書』、〔 〕は大阪市史編纂所蔵の杉村家文書や『ニッタ株式会社百年史』、〔 〕は神戸市文書館蔵の前田一郎家文書や高橋記徳碑（撰者：藤澤南岳）〔 〕は現在の新制高校に所蔵された学校資料や泊園文庫蔵の詩文集、〔 〕は山口大学医学部図書館蔵の四熊文庫や額賀記念東邦大学資料室蔵の額賀文庫、等々が挙げられる。ただ、これらの資料をもとに事例研究を積み重ねたとしても、その成果に類似した事例が当該地方・地域以外で認められる可能性も考えられる。そこで、現在関西大学アジア・オープン・リサーチセンターで進めている門人に関する伝記収集・略伝作成のプロジェクトをさらに推し進め、そこで得られた五百名近くにも及ぶ膨大な門人情報を踏まえつつ、個々の事例研究が特殊事例であったのか、それとも普遍事例であったのかを判定することとする。

### 4. 研究成果

(1) 2、3に述べたのが当初予定していた研究の目的および方法であるが、泊園門人の略伝集の出版という仕事が急遽舞い込んできたため、研究計画の大幅な変更を余儀なくされた。まず2020年度の研究では、略伝集の出版に向けて、その原稿を作成するとともに、執筆過程で得られた知見や構想をその都度発表した。泊園門人の略伝については、関西大学教授・吾妻重二氏が「泊園人物列伝」（『泊園書院歴史資料集 泊園書院資料集成1』関西大学出版部、2010年）の中で五十名ほどを紹介しているに過ぎず、その網羅を目指した試みはこれまでなされてこなかった。しかし、報告者が作成した略伝は2020年度末において五百名以上に達しており、これが完成し正式に出版されると学術的に大きなインパクトを与えることは確実であった。また本研究の課題に照らせば、泊園門人の行動面、とりわけその修学および業績をトータルに把握できるまとまった資料を作成することにつながり、これから泊園門人の意識面を考察する際にも大いに役立つことが予想された。泊園記念会が主催する泊園記念講座と同会が出版する雑誌『泊園』では、この作成した略伝の幾つかをピックアップして発表した。前者については、南岳百年祭という記念すべき行事が行われ、ここで最新の知見としての門人の事蹟を一般の方々に向けて発信することができたのは大きな成果であった。また日本中国学会と経営史学会では、泊園門人のうち実業家や企業家に注目したうえで、この作成した略伝の全体を踏まえた構想や見通しを発表した。両学会において強調したのが、明治期における泊園書院と実業界との深いかかわりであり、学主ばかりに注目されがちであった漢学塾研究の流れを改めてより広い視座 塾の門人に加えて学主に撰文を依頼した支持者の存在をも含めて から考察する必要を提起することができた。

(2) 2021年度の研究では、正式に泊園門人の略伝集を出版するとともに、昨年度と同じく、その執筆過程で得られた知見や構想をその都度発表した。吾妻重二監修・横山俊一郎著『泊園書院の人びと その七百二人』（清文堂出版）は、大阪の漢学塾・泊園書院の門人およびそれに準ずる人々の事績をまとめたものである。門人であることは門人略伝集『菁莪録』のほか、門人名簿、束修もしくは月謝の受領簿、同窓会員名簿、南岳の還暦・古稀祝賀会に参加した門生リスト、旧門下の人びとによる回想録、個人の伝記資料の記載内容から判断した。略伝本文の記述順序はおおむね、職能、出身、父親と出生順、名・通称・字・号、家柄、入塾年、略歴、著作といった構成である。収録人物の肖像をできるだけ多く掲載することにつとめ、さらに収録人物と泊園書院もしくは院主とのかかわりをできるだけ説明するよう心がけた。収録人物の職能は実業家、資産家、政治家、官僚、教育者、研究者、芸術家、文人、僧侶、宗教家、医師、新聞人、ジャーナリスト、弁護士、裁判官、社会事業家、篤志家、技師、著述家、小説家、社会運動家、武術家など、実に様々である。また各地域の政治史、経済史、教育史、医療史において足跡を残した人物も多く含まれる。泊園書院に学んだ人々の経歴を網羅的に収録した同書は、個別の門人研究の位置づけを探るうえでも有効なデータ集となりうると思われる。このほか、南岳百年記念論文集と関西大学アジア・オープン・リサーチセンター論文集に泊園書院出身実業家の活動やネットワークに関する論考を投稿し、さらに大阪府府民文化部文化・スポーツ室文化課から生涯学習講座の講演依頼を受けて「大阪の私塾・泊園書院の門人たち」と題する発表を行うなど、泊園書院の存在を研究者と一般の方々の双方にアピールすることができた。

(3) 2022年度の研究では、備中井原の学問所・興讓館に関わった泊園書院の人々、具体的には泊園書院と興讓館の両方で漢学を学んだ人物（黒井蓮溪、三井竹窓、小野桜山）と、興讓館の館長と姻戚関係を持った泊園門人（岡田柯一）を取上げ、近世・近代瀬戸内地域における漢学教養人の行動を調査した。黒井蓮溪（1851-1924）は備後出身の僧侶で、勤王博徒・日柳燕石の息子に漢詩を学んだ。蓮溪はのち備前の等覚寺の住職となり、当地において虫明焼の再興運動を支援する。三井竹窓（1852-1894）は讃岐出身の医師で、その祖父は燕石に漢詩を教えた。竹窓は香川県会議員に選ばれ、医療行政の分野でも活躍する。小野桜山（1853-1937）は備後出身の漢学者で、南画、篆刻、茶道にも通じた。桜山は豊前の景勝・耶馬溪の保存と日中の古典の収集につとめている。岡田柯一（1862-1917）は備中出身の医師で、その父は勤王儒者・森田節齋に師事した。柯一は都窪郡医師会の初代会長に就任、さらに倉敷教会に自らの屋敷を提供している。以上のように、四者の経歴を見れば、興讓館と泊園書院をつなぐ瀬戸内漢学ネットワークが存在したこと、本人もしくはその父祖が瀬戸内における勤王派リーダーと何らかの関わりがあったこと、本人が地域の文化もしくは産業の振興に積極的であったこと、の三点を理解することができる。こうした事実を踏まえると、あらためて漢学と近代と地域との深い関わりを認識できるように思われる。なお、研究期間全体を通じて、泊園書院出身者の行動面とその地域社会とのかかわりに関する研究は大いに進み、その成果は吾妻重二監修・横山俊一郎著『泊園書院の人びと その七百二人』（清文堂出版）にまとめられるにいたった。一方、泊園書院出身者の意識面に関する研究は、時間の制約もあり、思うように進めることができなかった。これについては今後の課題としたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 横山俊一郎	4. 巻 第53号
2. 論文標題 清水光明著『近世日本の政治改革と知識人 中井竹山と「草茅危言」』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本思想史学』	6. 最初と最後の頁 160～165頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山俊一郎	4. 巻 -
2. 論文標題 泊園書院に学んだ実業家たち 東ガイ〔田+亥〕・南岳叙位祝賀会の発起人に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『KU-ORCASが開くデジタル化時代の東アジア文化研究』	6. 最初と最後の頁 337～345頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横山俊一郎	4. 巻 第59号
2. 論文標題 泊園の門人たち（一）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『泊園』	6. 最初と最後の頁 111～137頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山俊一郎	4. 巻 第60号
2. 論文標題 泊園の門人たち（二）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『泊園』	6. 最初と最後の頁 87～105頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 横山俊一郎
2. 発表標題 大阪の私塾・泊園書院の門人たち
3. 学会等名 公開講座フェスタ2021（阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット主催）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山俊一郎
2. 発表標題 泊園書院関係碑文にみる藤澤南岳の実業観
3. 学会等名 日本中国学会第72回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山俊一郎
2. 発表標題 泊園書院で学んだ門人たちーその修学と業績について
3. 学会等名 南岳百年祭（第60回泊園記念講座）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山俊一郎
2. 発表標題 近代の漢学塾と企業家 泊園書院の門人調査を踏まえて
3. 学会等名 経営史学会第56回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山俊一郎
2. 発表標題 興讓館に関わった泊園書院の人々
3. 学会等名 興讓館創立170周年記念シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 吾妻重二・町泉寿郎・山寺美紀子・長谷部剛・太田剛・井上孝榮・横山俊一郎・陶徳民・増田周子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 遊文舎	5. 総ページ数 270
3. 書名 『「南岳百年祭」記念論文集』	

1. 著者名 横山俊一郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 清文堂出版	5. 総ページ数 390
3. 書名 『泊園書院の人びと その七百二人』（吾妻重二監修）	

1. 著者名 横山俊一郎執筆、吾妻重二監修	4. 発行年 2020年
2. 出版社 関西大学東西学術研究所・泊園記念会	5. 総ページ数 75
3. 書名 泊園書院の人々その百五十人（「南岳百年祭」発起人会配布資料）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

リサーチマップ

<https://researchmap.jp/0403>

泊園書院HP

<https://www.kansai-u.ac.jp/hakuen/index.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------